
夏祭りの不思議な恋心

黒之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭りの不思議な恋心

【Nコード】

N7735A

【作者名】

黒之

【あらすじ】

『8年たったらまた会おう?』そっくり残してなくなった君。誰も君の事を覚えていない。知らない。だんだん僕も君の事を忘れて、大人になっていった。二十歳の夏祭り、君は突然現れた。夏祭りに起きる悲しいラブホラー。

君との思い出

『8年待ってて。8年たったら戻ってくるから。その時はまた、一緒にお祭り行こう?』

あの時彼女はそう言った。小学校六年生、12歳の夏祭りの夜だった。

一緒に花火を見ながら。

その時君が言った言葉。とてもショックを受けた。

『私、引越するんだ・・・』

いつの間にか君は居なくなっただ。まるで神隠しにあったように。

その日から、皆がおかしかった。

クラスの友達に聞いても、先生に聞いても、お父さん、お母さんに聞いても誰も知らないって。

君の行き先を知らないんじゃないって、君の存在を知らなかったんだ。

僕が君の話をするたび、皆は「そんな子はいないよ」って笑ってくる。

何度も、何度も皆に説明したけど、信じてくれなかった。

先生なんか学級名簿にも載ってないぞ。って言ってきた。

その事があったから、僕は君の話をしなくなった。

だって変な事言う奴だって苛められたくなかったし、本当に君が居たのか、僕にもわからなくなったから。

でも、僕が君の事を忘れてから、不思議なことが幾つも起こった。僕達の住む町で、妖怪を見た! とか足のない人がこっちを見てきた。とかそういう話が凄く増えたんだ。

でも、それもすぐに無くなって、君の事を本当に忘れたまま、大人になったんだ。

そして12歳になって迎えた夏祭り。

突然君は現れた。

現れた君

『久しぶりだね。私のこと覚えてる？慶くん。』
その女の人は言った。

知らない人だ。いや、僕はこの人を知っている。

初めて会ったけど、僕はこの人を覚えてる。

「優雪ちゃん!？」

自然と名前が出た。何でだろう？

彼女は8年前に何処かへ行ってしまった人だ。

だから彼女も僕も8年経ったお互いの顔なんて分るはず無い。

特に僕なんか知り合いに小学校のころの卒業アルバムを見せると
異口同音に

「全然面影ないね」

って言われるくらいだ。

でも、何で分ったんだろう？

「何で分ったの？」

不思議だから聞いてみたんだ。

『分るよ。だって慶くん根っここの所が変わらないもん。優しい心
は変わってない』

「根っこ？」

『そう、根っこ。人の魂の色、音って言うのかな？具体的には言
えないけどね』

フフッと笑って言った。

小学校のときと変わらない、優しい笑顔。

彼女を思い浮かべるとき、いつも背景は真っ白だった。

他の友達を思い浮かべるときは、体育館だったり、グラウンドだ
ったり、教室だったり。何時でも世界の一部が背景に出てきてた。

だけど彼女を思い浮かべるときだけ、何も現れない、ただの真っ
白だった。

そんな雪みたいな笑顔が、僕は好きだった。

『ね、8年前の約束、覚えてる？』

8年前。急に頭の中に一つの文が浮かんできた。

「『8年待ってて。8年たったら戻ってくるから。その時はまた、一緒にお祭り行こう？』」

綺麗にハモった。

『良かった。覚えててくれたんだ』

嬉しそうに笑う君は神秘的で、少し寒気がした。

『ほら、ちゃんと浴衣着てきたんだよ？似合う？』

袖を持ち上げて、くるくる回る。

水色の浴衣に黒い髪を縛ったポニーテールが可愛い。

子供のような仕草だけど、其処には妖しさもあってドキツとしたんだ。

「う、うん。似合うよ」

『良かったあ。似合わないとか言われたらどうしようかと思った』
エヘヘ、と笑う。

今の僕の頭の中では、会えてよかったと言う気持ちと、一寸した恐怖が半分に別れていた。

憩いの時

『慶くん、今度はあれ食べよう』

君はそう言って僕の手を引っ張る。空いている方の手にはリンゴ飴が握り締められている。

僕は君に引き摺られながら、宥めるように言った。

「優雪ちゃん、落ち着いて。屋台なら他にもあるし、何より今リンゴ飴食べてるだろ？」

すると君は

『じゃあお願い。これ慶くん食べて？』

と言いながら僕の空いている方の手に渡した。

「食べてって……」

顔を赤らめながら言うと、君は小首を傾げて言う。

『お願い』

仕方なく、食べかけのリンゴ飴を齧る。

何か悪いことをしている様で、緊張して甘味以外の味を感じなかった。

「ほら、食べてあげるからもう一寸ゆっくり行こう？」

そう言うと、今度は僕の思考力を奪う発言をした。

『駄目だよ。あの屋台にしか売ってないチョコソースたこ焼きなんだから』

チョコソースたこ焼き？

思考を停止した僕の手を引き、君は人混みのなかを突き抜ける。

そのチョコソースたこ焼きを売る屋台は、チョコとたこ焼きと言うミスマッチが評判を呼んでいるのか、かなりの列が出来ていた。

『よかったー、間に合った。ね？ 早くしないと売り切れちゃうって言ったでしょ？』

君は笑顔で僕に言う。

『一寸待っててね。買ってくるから』

呆然とする僕を尻目に、君は列の最後尾に並ぶ。

その君の期待に赤くした顔を眺めながら、僕はリンゴ飴を舐めていた。

やがてリンゴ飴も食べ終わった頃、君は笑顔で僕の方へと早足で駆けてきた。その手にはたこ焼きのパックが二つあった。

「…二つも食べるの？」

嫌な予感を無理矢理無視して君に聞いてみた。

『え？慶くんの分だよ？』

やっぱり。軽い絶望感に苛まれている僕を知ってか知らずか

『きつと美味しいから食べてみてよ！』

と君は言いながら僕に手渡す。

その自信は何処から来るんだろうかと思いつながら

「歩いて食べるのもなんだから、何処かベンチまで行って食べよう」

と提案し、二人で人混みのなかを歩いていった。

はぐれない様に僕の腕を掴む君の手に、軽い違和感を覚えた。

服の上だからと、無理にこじつけて気にしないようにした。

そして空いているベンチを見つけると、其処に腰掛けてパックを開いてたこ焼きを食べ始めた。

君が君じゃなくなる。

『うん♪美味しー美味しー♪』

君はチョコソースのかかったたこ焼きを美味しそうに頬張る。

二分も経たないうちに半分を食べていた。

僕はと言うと、出来るだけチョコソースを爪楊枝で取り除いて、鼻をつまんで口に含むので精一杯だ。

味覚を感じない今の僕の口の中では、とろとろに溶けた熱々の生地と、大きくぶつ切りにされた蛸の足が踊っている。

そうやって何とか二つ食べ終えた僕は、

「久しぶりだね、二人で此処来るの。今まで何処行ってたの？」

と、最後の一個を口に含もうとしている君に問い掛けた。

すると君は一切の動作を止め、こっちを向いて

『……何で？』

と、先程の君とは打って変わって、とても暗い表情で聞き返す。

その手には最後のたこ焼きが持たれたままだった。

その余りにも暗い雰囲気纏ってしまった君に恐怖を感じながら僕は言った。

「何で？って……。八年間も離れちゃったんだから、やっぱり引越し先の話とか聞いてみたいじゃない？」

君の雰囲気は変わらず、とても低い声で言った。

『別に良いじゃない。そんな事』

余りにも声が低くて、君の声ではないような気がした。

「で、でも、気になるし……」

恐怖に負けて、声が裏返る。

我ながら情けないとは思うけど、シャツを着た僕の背中中は冷や汗と脂汗でびしょびしょだった。

『それってどう言う事？私の事を好きでいてくれるから聞きたいの？それとも……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7735a/>

夏祭りの不思議な恋心

2010年10月21日22時54分発行